

## 「ただいま」

主任司祭 晴佐久 昌英

あえて、そう挨拶させていただきます。なにしろおよそ十年前、三年間もここが我が家だったのですから。ぼくはここで飲んだり食べたり眠ったり、泣いたり笑ったり祈ったりしたのです。ぼくはここで調子に乗ってはしゃいでいるのを暖かく見守られ、精一杯奉仕しているつもりで逆に支えられ、落ち込んで真っ暗だったときに励まされて立ち直ったのです。高円寺教会は、間違いなく我が家であり、皆さんは血の通いあった家族でした。

誰にとっても、教会は我が家です。信者はみんな家族です。そうでない教会に何の意味があるでしょう。そうでない教会に誰が帰ってくるでしょう。家族は、何があっても家族です。意見が違って、傷つけあったとしても、離れ離れになっても、血のつながった家族です。私たちキリストの家族は、キリストの御血でつながった真の「血縁」であるべきです。

司祭も教会も多い東京教区で、もといた教会に戻ってくるのは異例なことです。パズルのような人事のやりくりの末に起こった偶然とも言えますが、ぼくはそこにどうしても摂理としか言いようのない導きを感じます。ぼくにとっては、そのひとつはたぶん「恩返し」でしょう。かつてここを去るにあたって、ぼくはこの同じ「いしずえ」に、こう書きました。「高円寺の皆さんにはどんな感謝の言葉も足りない。ただひとつ、ぼくが新任地の教会を、誰もが生きる喜びを歌うところができるならば、それがなによりの恩返しだと思っている」

そして、今回の新任地はここだったのです。では、皆さんにとっての摂理は何でしょうか。それは、教会を真の家族にするようにという招きではないでしょうか。神様は一人の司祭の帰還によって、信頼と安らぎと希望にあふれた家族、誰でもそこへ帰ってこられる天国のような家庭を生み出そうとなさっているのではないのでしょうか。どうかみなさん、摂理への信頼をもって言ってください。「おかえりなさい」と。